

佳作

Little DJ

長野県 長野高等学校一年 田中夕紀

わたしは、心を強く打たれた一冊の本があります。それは「Little DJ」という本です。この本は、将来ラジオのDJになりたいという夢を抱いている一人の少年の話です。この少年は、病院のお昼の放送のDJをやりました。最初は、お昼に流す曲名を言うだけでしたが、次第にリクエスト曲を言うだけでしたが、次にリクエスト曲を募集したり、生放送をしたり、ゲストを招いたりなどしました。そんな少年のDJは、病院内でも好評でさまざまな人から毎日声をかけられました。

「今日のDJよかったよ。」
「あたしのリクエスト曲はまだ？」

など、人々の温かい声が彼にとって何よりの生きがいでした。

ですが、ただひたすらに自分の夢を追いかける少年には一つ大きな問題があります。「白血病」彼がその小さな心と体で背負っている大きな病気でした。

私は、この本を読んでいるとき「もし自分が白血病だったら、何をやるだろう」と何回も考えました。ですが、考えれば考えるほど出てくるものはマイナス思考のものばかりでした。きっと、全てのことに対してどうでもいいと感じて、何事もやる気がなくなってしまうかもしれない。ましてや、夢を追いかけるなんて考えもしないことかもしれないと感じました。

なら、どうして少年は、病気のことを知っていても自分の夢を追いかけたのか。この少年は病気が怖くないのか。死んでしまうことが怖くないのか。また、この少年はまだ小学校五年生です。私より、とても小さい少年は、どうして私よりも心が強いのだろうか。この本を読んで

いて、何度も不思議に思ったことです。

ですが、私はこの本を読み終わって気付きました。この少年は死んでしまうことが怖かったのではなく、自分のやりたいことをやらないまま終わってしまうことの方が怖かったのではないかと。何か、真剣に取り組みたい、夢中になってやりたい、と思えるものを達成できないまま終わってしまうのでは、絶対に後悔してしまいかもしれないと思ったのではないのでしょうか。

私はこの少年の生き方から、今を大事にすることの大切さを強く感じました。もし自分の中で、「どうして行動しなかったのだろう」「どうしてやらなかったのだろう」など、行動して失敗した後悔より、行動せず終わってしまった後悔の方が大きいということを、少年は分かっていたのかもしれません。

また、この少年は、同じ病室の女の子に恋をします。その時、隣のベッドの患者さんに言われた言葉が、私は強く心に残っています。

「好きなら好きって言いな。後悔なんてのはよ、いくらしたって何も残りやしねえんだ。そして、男ってのは好きな女のことを絶対忘れられねえようにできてんだ。」

この患者さんには、過去にとってもつらい思い出がありました。それは、好きな女の人に恥ずかしくて気持ち伝えられなく、ずっと思いを秘めたまま二ヶ月が経ち、いざその人に気持ちを伝えようとしたとき、その女の人は亡くなっていたのです。「どうしてあの時言わなかったのか。」「どうしてすぐに伝えなかったのか」言葉にできない悔しさと、後悔が襲ってきました。ですから、この患者さんは「今を大切にしろ」「あと

から後悔しては遅い」と、少年に力強く伝えました。

私がこの本を読んでいて感じたことは、誰にでも明日が百パーセント来るとは限らない、ということ。そして、自分の身にいつ何が起こるのかも分からない世界の中で「今を後悔しない」生き方をしなくてはならない、ということでした。つまり、あとから後悔しても遅いのです。失敗してもいい、上手くいかなくてもいい、ただ、自分の気持ちに挑戦することに大きな意味があるのです。この少年の生涯は、本当に短かったかもしれません。まだ小学校五年生で、やりたいうこともたくさんあったと思います。ですが、私にはこの少年の生涯は「短かった」とは言い切れないと思いました。理由は、この短い生涯の中で、夢を必死で追いかけて、毎日生きがいを感じながら充実した日々を過ごしていたからです。また、病状が悪化してきて、DJはもう無理だ、親や医師から言われても「僕はまだ生きている」とDJを最後まで続けた少年の生き方は、とても感動するものがありました。涙なしでは読めないこの本は、私にさまざまなことを教えてくれました。この本に出合えてよかったです。